

## 5 病虫害防除

### (1) 病害

#### ア 黒穂病

黒穂病の発生ピークは、4月～6月と10月～11月である。黒穂病は、汚染種苗と胞子飛散により伝染する。胞子は芽子から侵入するので側枝苗等については留意する。防除法として、薬剤による種苗消毒があるが耕種的防除に重点をおく。

#### (ア) 蔓延防止対策

- a 罹病ほ場からの採苗はしない。
- b 罹病茎の切り取り、抜き取り等により胞子飛散を防止する。
- c 側枝苗は、側枝切除口からの胞子侵入が容易となるので留意する。
- d 抵抗性品種 (NiF8、NiTn19、宮古1号) を栽培する。
- e 罹病ほ場では株出をしない。(更新する)

#### (イ) 発生ほ場での防除法

- a 少発生ほ場では、罹病茎を抜き取り焼却する。

( 鞭状体出現前に抜き取ると防除効果は大きい )

- b 多発生ほ場では、

( a ) 鞭状体の出現前の発生株は、鎌等で切り取り畝間に放置する。

( b ) 鞭状体の出現した茎は、胞子飛散を防ぐため、鞭状体部分を切り取りビニール袋に入れ密封して日射にさらす。(高温殺菌)

#### (ウ) 物理的防除法

- a 種苗消毒：農薬による種苗浸漬または温湯処理 ( 52 ℃ 20 分 ) を行う。



#### イ 葉焼病

葉焼病の主な発生時期は、11月から翌春の4～5月にかけてである。原料茎では、出穂後11月下旬から12月初旬にかけて急激に発生する。

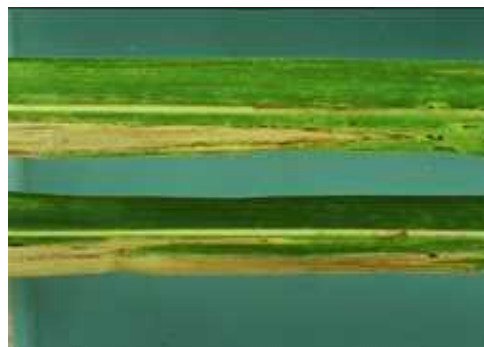
(ア) 発生の範囲が狭い地域で剥葉し、病葉をほ場から除去し焼却する。

(イ) 発病の多いほ場は株出しをさける。

(ウ) 収穫後の被害残葉は、焼却または畦間にすき込むか集めて堆肥にする。収穫時の罹病稚茎は刈り取り、ほ場に残さない。

(エ) 抵抗性品種 (NiF8、Ni21、Ni22、Ni24、NiH25、Ni27) を栽培する。

(オ) ススキは、伝染源となるので、ほ場周辺ではできるだけ除去焼却する。



## ウ 葉枯病

葉枯病は、5～6月、10月～12月の冷涼期の雨の多い年、また、国頭マージおよび島尻マージ地域で発生が多い。

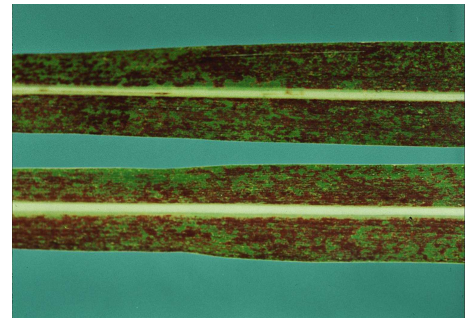
- (ア) 剥葉<sup>はくよう</sup>して風通しをよくする。
- (イ) 発生の多いほ場は株出しをさける。
- (ウ) 抵抗性品種を栽培（Ni22、NiN24等）する。



## エ さび病

さび病の発生は宮古・八重山4～5月、沖縄本島5～6月にピークがあり、秋までみられる。窒素過多、風通しの悪い所、乾燥地に発生しやすい。

- (ア) 窒素肥料の過用をさける。
- (イ) 下葉を剥葉<sup>はくよう</sup>し、風通しをよくする。
- (ウ) 抵抗性品種（NiF8, NiTn10, Ni11, Ni13, Ni15, Ni16, Ni17, F161, Ni21, 宮古1号, NiN24, NiH25, Ni26）を栽培する。



## オ 根腐病

病原菌はピシウム属菌とトリコデルマ属菌の2種類がある。

ピシウムによる根腐病は春季と冬季に発生するが、新植茎の初期に感染したものは生育不良となり、著しいものは枯死する。排水不良のほ場で発生しやすく、また防除は耕種的防除法に重点をおく。

- (ア) 排水を良好にする。
- (イ) 発生ほ場は輪作を行う。

トリコデルマによる根腐病は、苗の根と芽を腐敗させることによって、発芽率の低下をも

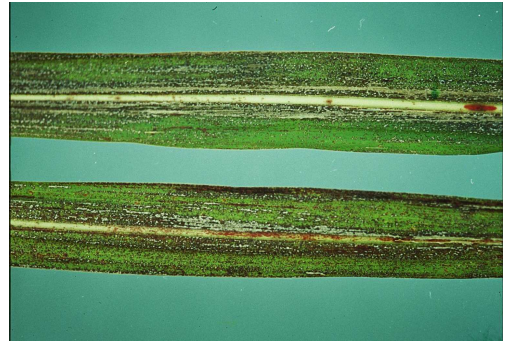
たらす。排水不良のほ場で発生しやすく、現状では本病の発生生態については明らかではないが、苗伝染の可能性が高いと考えられる。防除はピシウムによる根腐病と同様にほ場の排水性を良好にすることが重要である。



## カ 白星病

白星病は山地開発地に多く発生するが、特に国頭マージとカニク土壤に発病が多い。10月から発生し収穫期まで続く。

- (ア) ケイ酸と炭酸カルシウムを施用  
(750kg / 10a) する。
- (イ) 乾燥が続き土壌が乾燥する場合は灌水する。
- (ウ) 抵抗性品種を栽培する (Ni16)。



## キ 白すじ病

白すじ病は葉、葉梢に発病し、葉に数本の白色または黄白色の条斑が現れる。生育初期に発病すると葉全体が白くなり、株全体を枯死させる場合もある。主に種苗、収穫時の斧、鎌や野ソ及び害虫の食害によって伝染する。

- (ア) 抵抗性品種を栽培する。
- (イ) 無病苗を選択して植える。
- (ウ) 切断刀を消毒する。(アルコール 75%)
- (エ) 罹病株は抜き取り除去する。
- (オ) 野ソや害虫を防除し、伝染源を減少させる。
- (カ) 抵抗性品種 (Ni9, Ni15, Ni17, Ni21, Ni22, NiN24, Ni26, Ni28, Ni29, F161, F177) を栽培する。



## ク 葉片赤斑病

葉片赤斑病は5~6月頃から発生が増加し、7~8月の乾燥期には多少減少するが、9~11月にかけて発生が多くなる。ただし夏季でも降雨の多い年は、多発生する。防除は耕種的防除に重点をおく。

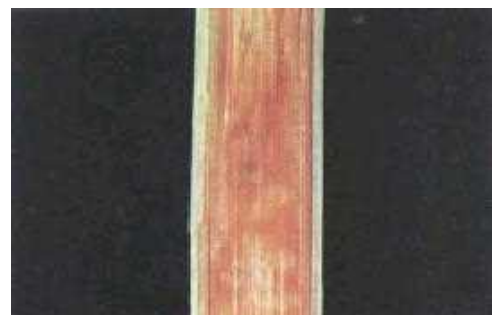
耕種的防除法

- (ア) 収穫後の被害葉、残茎は除去、焼却する。
- (イ) 発病初期に罹病葉は除去する。
- (ウ) ほ場の排水をよくする。
- (エ) 発病の多いほ場は早期に更新する。

## ケ 赤腐病

赤腐病は主にメイチュウ類の食痕及び胴割れした傷口等から侵入し、成熟期の蔗茎を侵害し品質を低下させる。したがって、メイチュウ類の防除、胴割れや亀裂の発生しにくい品種を栽培し、被害の軽減を図る。

- (ア) メイチュウ類の被害を受けないように防除を徹底する。





## コ 梢頭部腐敗病

梢頭部腐敗病は、夏季の多雨など高温多湿期に発生が多く、特に乾燥後の多雨や多雨後の連続晴天などの場合に多発する。なお養分の少ない土壌、または窒素質肥料の過用は本病を誘発し易い。

- (ア) 無病苗を選択して採苗する。
- (イ) 窒素肥料の多用をさける。
- (ウ) 病葉、残葉を集めて焼却し、伝染源を減少させる。



## サ 褐条病

褐条病の発生は生育初期の春期に多く、リン酸、カリの欠乏した時発生しやすい。品種によっても発病程度が異なる。

- (ア) 発生ほ場はリン酸、カリを増肥する。
- (イ) 乾燥期には灌水を行う。
- (ウ) 剥葉<sup>はくよう</sup>して風通しをよくする。

## シ モザイク病

モザイク病は種苗及び汁液伝染するが、ほ場では主としてアブラムシ類により伝播する。特に、種苗による伝搬は重要であるので、ウイルスフリーの苗を利用する。

- (ア) 種苗管理センターより供給されるウイルスフリー苗を利用する。
- (イ) ほ場管理を徹底し、アブラムシ類の発生を防止する。
- (ウ) 罹病株は抜取り、焼却する。
- (エ) 肥培管理を十分に行い草勢を良くする。
- (オ) 媒介虫であるアブラムシ類の防除を行う。



## ス 黒腐病

黒腐病は、主に定植直後の苗で発生し発芽不良の原因となる。罹病茎は、芯部が黒変しパイナップルに似た臭いがする。一般に乾燥など発芽が抑制される条件で発病しやすいとされる。本病は、刃物、罹病茎による種苗伝染、土壌伝染する。

- (ア) 被害茎から採苗しない
- (イ) 切断刀を消毒する（アルコール 75%等）
- (ウ) 土壌が乾燥している場合は、定植時に適度な灌水をする。

